

論文

母子家庭の母親のライフストーリー研究

塚 田 守

はじめに

本稿は、現在、看護専門学校の1年生の娘と高校1年生の息子を育てている母子家庭の母親として生きる一人の女性のライフヒストリー研究である。母子家庭の状況を日本社会の貧困問題、雇用慣行、ジェンダー問題の複合的な社会問題として、その背景にある要因を社会的に論じる研究は多くある（赤石 2019 年、小林 2015 年、水無田 2014 年）が、本稿は、そのような社会問題の解明をめざすものではなく、あくまでも一人の女性のライフストーリーを描写し、彼女の人生の中の転機にどのような要因が関係しているかを描写し、日本社会の社会的要因や価値観が彼女の人生にどのように影響した来たかを理解しようとすることを第1の目的としている。次に、母子家庭の母親になった女性がどのような生きてきたかについて彼女自身の語りを詳細に描写することで、母子家庭の母親として生き生きと生きる可能性を示すことを本稿の第2の目的としている。そして、本稿の最後で、アトキンソン（2006 年）が論じている人生の物語を語るものの意味について言及している。

1. 研究対象者と研究の方法

研究対象者¹

Aさんは筆者の元ゼミ生という関係であり、大学2年生からゼミの学生として知っている。4年生の時は、ゼミのリーダーだったAさん。この学年のゼミ生とは、卒業論文の中間発表のための2泊3日のゼミ合宿で盛り上がり、単に卒業論文のことだけでなく、さまざまな個人的なことも話し、授業の中では考えられなかった一体感のようなものが生まれた。この合宿を境にゼミ生同士、教師とゼミ生との間に親密なコミュニケーションが生まれたのではないかと、ゼミの教員としては思えた。そのようなゼミだったので、卒業後も数年の間、毎年ゼミの同窓会をしていた。Aさんが卒業4年後の26歳の時、長女を妊娠した状態でゼミ同窓会に出席していた。その後、しばらくゼミ会には出席してなかった。10年前の2009年に離婚をしたという「笑顔の年賀状」を送ってきたことが印象的だった。その後、看護師になるために受験を考えていると言って研究室を訪ねてくれたこともあった。しかし、また連絡が来なくなった。そして、2019年久しぶりのゼミ会で、看護専門学校を卒業し、看護師になって働いていると元気に話していた。

Aさんは今も看護師として働いている。現在、母子家庭の母親として二人の子供を育てている女性である。なぜ、母子家庭になったのかという興味からライフストーリー・インタビューをすることにした。同級生からは、「元気な女性」と呼ばれ、一般的に言われる母子家庭の母親というイメージではなかった。2009年に「離婚しました」と子供二人と一緒に笑顔の写真の年賀状を受け取った時には、元気なAさんにとっては、離婚はスティグマではなく解放なのか、と思ったほどであった。時代の変化を感じながら、「元気な母子家庭の母親」の人生の物語を聞き取りたいと思ったのが、この研究の出発点だった。社会学的テーマをあらかじめ設定し研究するというものではなく、彼女のライフストーリーについての仮説も持たず、ただ興味を持ってインタビューを行なった。

研究の方法

インタビューは2019年8月26日に4時間ほど筆者の研究室で行われた。その後、10月16日、11月8日とそれぞれ3時間から4時間のインタビューも行った。ライフストーリー・インタビューは、今までの人生での出来事、経験、それに対する本人の思いを自由に語ってもらう形式で行われた。元ゼミ生とゼミの元指導教員ということで、時には、インタビューの中で筆者自身の話もする雑談的インタビューになったりもした。その意味で、「対話的」という以上に友達同士の会話のように行われた。3回のインタビューを通して、Aさんの元気な笑顔の背後にある壮絶な人生の経験、彼女の正直な語りに衝撃を受けると同時に学ぶことが多かった。本稿で使われた語りは基本的には3回のインタビューの内容であるが、3回のインタビュー後にAさんと直接会うことができない時に、筆者のメールでのいくつかの質問にAさんがメールで答えてくれた内容も語りとして取り扱い、描写し分析する対象になっている。

本稿はライフストーリー・インタビュー方法(桜井 2002年)によるものである。本研究は、研究対象者にライフストーリーについてのインタビューを行い、その個人の今までの経験したことやその経験についての本人の主観的思いを自由に話してもらい、質問をして聞き取った結果を、その個人のライフストーリーとしてまとめ、考察している。一般的な実証科学のように、研究を始める前に先行研究を行い、そこから導かれた仮説を検証する研究ではない。また、ジャーナリストや社会問題解決志向の研究者のように、あらかじめ、社会問題を特定し、その実態を把握し、その解決策を提案する研究をめざしているわけでもない。インタビュー対象者のこれまでの人生におけるさまざまな出来事の経験やそのことについての主観的想いを語ってもらうことで、本人がその意味について再解釈し、インタビュアーの筆者もその経験を聞き、解釈することで、何かを学び、自らの人生経験について反省的に捉えようとしている。その意味では、語り手が語り、聞き手が聞き、お互いに自らの人生を反省的に捉えることを目的としている。

インタビューの理論枠組みとしては、「対話的構築主義」の立場を基本として、聞き取られた語りは、あくまでもインタビューという場面で立ち上がったもので、インタビュー対象

者（母子家庭の女性）とインタビュアー（研究者である筆者）の構築された対話的構築物であり、両者の共同作品であるという立場をとる。桜井（2005年）が指摘するように、ライフストーリー・インタビューにおける語りには、会話、ストーリー領域、物語世界の3つの異なる位相があり、語り方としてのストーリー領域と語られたことである物語世界の関係が重要である。その意味で筆者がどのように質問し、インタビュー対象者がどのように語ったかの関係性は重要な点であることを考慮しているが、本稿では、語り手であるインタビュー対象者の語りの内容により重きを置き、その物語を描写し、解釈することに焦点を当てる。インタビュー対象者の生活世界を理解し共有することが、筆者が最も興味を持っているからである。アトキンソン（2006年）のライフストーリーの理想は、語り手自身の語りを読みやすいストーリーにするために最小限の編集作業をするだけでよいとしているが、本稿では、語り手自身の語りを提示しながら、その語りの意味解釈を聞き手である筆者が行い、本人の語りを時系列的に整理し、その語りの中のキーワードに注目して全体的なストーリーを描写する形をとっている。そうすることによって、語り手の語りを社会学的ストーリーとして書いている。その意味では、Atkinson（1998年：61-63）が論じているように、ライフストーリー・インタビューは、インタビュー対象者とインタビュアーの共同作業で、インタビュアーはあらかじめ研究のテーマを持っているかもしれないが、語られたライフストーリーが一番の重要なことであり、研究のために録音されたストーリーではない。ライフストーリーのウイン・ウインの状況（語り手と聞き手両者にとって良い状況）が重要で、インタビューをすることで一番大切なことは、語り手自身にストーリーを語ってもらい、その人が自らのストーリーを新しく、より明確に人生の経験を振り返り、人生の経験に対して、異なった解釈できるようになることである。そして、インタビューの場面は、インタビュアーもまた、インタビュー対象者のストーリーを聞き、自らの人生の経験を振り返る場でもある。その意味で本研究はインタビュー対象者とインタビュアー両者にとっては人生の意味を創造する行為ではないかとも考えている。

2. Aさんのライフストーリー

2.1 大学生時代から結婚するまで

Aさんが21歳の1996年頃、女性にとって就職は「腰掛け」に過ぎず、寿退して専業主婦になるということがまだ一般的であった。短大は嫁入り道具だと考えられ、短大に行く同級生が多かった。しかし、Aさんは短大では文学しか勉強できないと思い、4年制大学文学部英文科に進学した。4年生の就職活動を始めた頃は、20歳からそれまで服用していたアトピーの薬を止めたことによる症状が出て、就活などほとんどできず、精神的にも肉体的にも大変な時期だった。4年生の終わり頃の年明けに2つの就職先を受け、一つに内定が決まり、そこで働くことになった。その会社は「ブラック」だったと振り返って言う。

超ブラック企業だったので、3か月で辞めたかな。入って一週間の引継ぎだけで、自分でやるしかないですよ。終電帰りでした。「早く帰ってもいいよ」と言われたけれど、帰れないじゃないですか。仕事は、医療の総合商社の営業事務でした。まあ、無理ですよ。

3か月で辞める決意をし、1週間の引き継ぎをして退社した。その後、学生時代にアルバイトをしていた所に非正規で勤め始めた。「大学2年生の時から彼氏と付き合っていて、結婚すると思っていたので、それまでの腰掛」という気分が強かった。せっかく4年制大学を卒業したので、形だけでも就職するということに過ぎなかった。フリーターではなく、正社員として勤めたいと思っていたが、彼も「体調の問題もあるので、結婚するまでの時期だから働く必要ないのではないか」と言っていた。ホテルの事務、パン屋さん、塾の講師、家庭教師をやったりした。その後は、結婚するまでほぼ3年間は非正規で勤めていた。

Aさんの両親は、「女の子は愛嬌があればよい。子供を産んでパートをやれば十分」と考える人たちだった。3人姉妹の真ん中で、両親との関係は必ずしも良くなかった。Aさんは、両親を「毒親ⁱⁱ」と呼ぶ。

私の両親は毒親だったので、自己肯定感の問題とか、アトピーで苦しんでいた時、親は「お金はだすけれど、何もしてやれない」という人たちだったので。子供の立場としては精神的ケアがほしかったけれど、それは期待できなかった親だったので。お金を出してくれたことには感謝していたけれど、子供ながらに、「切られた」という思いがあったので。

そのような親に育てられたので、外から見ているAさんの姿とは違い、「私は自己肯定感が低く、劣等感の塊です。自分が自分をどう評価するかよりは、他人の評価を気にする人でした」という自己認識をAさんは持っていた。

2.2 結婚

愛情を感じることが出来ない両親に育てられたことで、心の救いを当時付き合っていた彼に求めた。付き合っていた頃、「安全基地があるというような、彼がなってくれていた。・・・彼にとって20代の時の私だった」とお互いに必要としていた。

Aさんの両親は、結婚相手の男性に望むことは経済力だけだと考える人たちで、結婚相手として当時フリーターだった彼との付き合いには反対していた。彼が大手企業の正社員になったので、彼27歳、Aさん24歳で結婚する準備をしていた。自営をしていた両親はAさんの結婚相手のことが気になり、安心を買うつもりで興信所に依頼し、彼のことを調べた。その報告書によれば、彼の父親には闇金融から多額の借金があった。Aさんは、「借金は親の問題であって彼の問題ではない」と言ったが、父親から「諦めた方がよい」「別れるように」

と言われた。父親は A さんに「お前の価値観は俺が決める」という人で、家父長制の最たる人だった。彼の財政的な状況も考え、A さんも将来的に働く必要を感じ、さまざまな資格を取ろうとしていた。

簿記などの資格を取るために専門学校に通うことを考えていました。長く働かなくてはいけないと思い、5 年後、10 年後に結婚しないという場合も考えていました。そのようなことを話したら、お父さんが激高して、「そのような男とは別れると言え」とお父さんから言われて、「親の言う結婚は無理だな」と。「さようなら」と言って家出したのが、25 歳の時。夜の 11 時頃に鍵を開けて泥棒のように私がそのアパートに転がり込んだという。

彼との結婚に反対された A さんは、1999 年 7 月に家出という強硬手段を取り、彼のアパートで一緒に暮らし始めた。その当時のことを思い出し、A さんは、「結婚は勢いだった」と振り返る。2000 年 3 月頃に、彼の叔父が A さんの父親のところに挨拶に行き、説得してくれようとしたが、「傷者はいない、今家に帰ってきてても居場所はない」と言われた。その 2 か月後に、彼も A さんの実家に挨拶に行ったが、父は A さんの彼の顔を見ることはなかった。「出て行った子はどうでもいい」と父親に言われた。その後、実家とは絶縁状態になってしまった。2000 年 6 月には二人だけでアメリカのフロリダ州で海外結婚式を挙げ、2 次会は友達と日本で行った。

2.3 結婚生活

2000 年 5 月に 26 歳で結婚しパートとして働いていたが、すぐに妊娠して、職場を辞め、2001 年 5 月に長女を出産した。そこから専業主婦として子育てをしていた結婚生活だった。その時の子育ての大変さについて振り返って言う。

その時期大変でしたね。(夫が勤めたのは)総務部、人事課。結婚した時に、上司に「家庭生活のことは諦めなさい」と言われました。帰ってくるのが、2 時か 3 時が当たりまえですよ。1 時前に帰ってくることはなく、12 時前に帰ってきたら、「どうか具合悪いの」と聞くぐらいでした。ですから今で言う、私は「ワンオペ育児」でした・・・完全に密室育児だったのですね。私は世間に出て行って、みんなとわいわいできる性格でなかったのが、完全に密室育児だったです・・・娘がかわいかった。・・・週末しか旦那がいませんでした。・・・「今日何してた」と聞かれたら、ずっと娘を抱いていたというような感じで。べったり。旦那はそういう人だから話できない。言葉通じない娘と二人だけで。・・・夜泣きすごくて。私は夜中も起きていました。泣いちゃうと旦那さん、寝れないでしょ。

結婚した夫は、職場で大きなプロジェクトを抱えており、帰宅が午前2時3時になることもあった。世間でよく言われる「ワンオペ育児」（藤田年 2017）だったと振り返る。日常的に相談し話す人もなく、「会話をしたのは近所のスーパーのおばちゃんたちだけだった」と言う。娘が1歳だった時の育児を思い出し、「殺さなくてよかった」と振り返る。「やるかやられるか、虐待する世間で起きる事件と紙一重だった」と言う。

元気で働いていた頃の夫との会話が当時の結婚生活について物語っている。

夫の会社の仕事と私の母親としての仕事のどちらが大切かということで話しました。その時に迷わず、「私は命を預かっているのだから、大変な仕事だ」と言いました。当時池田小学校事件があった頃で、「間違っていて育てたら、あのような事件を起こすことにもなるから」と言っていました。

夫が遅くしか帰宅しなかったことによる育児の大変さを訴えたが、夫は聞く耳を持たなかった。Aさんは、「三つ子の魂100歳までも」ということわざを信じており、娘に抱き癖がついても良いと思い、よく抱いてあやしていた。Aさんの両親は彼ら自身の視点からAさんを愛してはいたが、Aさんはそのような両親からは愛情を感じることもなく、自己肯定感を持つことが出来なかったのも、娘を自己肯定感が付くようにと子育てをしていたようだった。

3年後の29歳の時に長男を出産した。その時の夫はますます忙しくなり、帰宅が3時あるいは4時で、午前8時から出勤するという生活だった。「帰ってこない日もありました。過労死してしまうのではないかと考えていました」とも言う。夫は新しい給与システムの開発の責任者になっていた。また、夫の職場には「メンヘラ」の部下の女子社員がいて、夫がそのメンタルサポートをやっていたようだった。そのように思った時、Aさんは、「私のサポートせんかい、あなたはこんだけ子育てをしている嫁のサポートもせず、よその女のサポートをしているの」と言ったりもして、夫婦喧嘩したこともあった。夫は家で安らげることもなかった。「誰も私の面倒を見てくれない」と育児に追われ、疲れていた頃の自分を思い出す。夫の生真面目な性格とAさんの疲れ切った子育てのストレスが夫婦関係を悪化させていた。

もし彼が、上司が言ったように、家庭生活を諦めれる人だったら、彼は病まなかったのだと思います。ただ、うぬぼれも入れて、私だったから、家庭も大切にしようと思ってがんばって、追い詰められたのではないかと思います。・・・「仕事量が問題で膨大で遅くなるのか、あなたの能力が低くてできないのか」と聞いたことがあります。もちろん、切れさせてしまいましたが（笑い）、・・・「新しいプロジェクトにかかわっていたので、大変だったろうな」と今は思います。「かわいそうだった」と。

そのような結婚生活が4年ほど続いた後、夫が突然うつ病になった。

2.4 夫がうつ病になって

2004年11月のある朝、夫は8時過ぎに出勤したが、パソコンを忘れたので帰宅した。疲れているということでその日の午前中を休んだ。その日のことをAさんは鮮明に覚えている。

ある日突然。出勤するのですよ、8時頃。パソコン忘れたと帰ってきたのですよ。そうなると半休になるので、「寝るわ」ということで寝たのですが、そこから起きられない。何かが切れたのでしょうかね。そこが限界だったのだと思います。・・・1週間前も七五三などもやっているのですが、その時にはもうえらくて。辛そうだった。・・・無理して父親役割を果たしてくれていました。ブツンと切れたのでしょうかね。ここから会社行かない。休職は2年半。いったん復職して、半年で再発。・・・1年近く会社に残してもらっていました。

夫はうつ症状が出た後、寝てばかりいて、家を出ることができなくなった。それからずっと仕事に行けなくなった。子供たちは父親が好きだったので、うつ病になっている夫にまつわりつくことがあった。その当時の生活について振り返る。

心療内科を受診し、内服による治療が始まると、数週間は寝たきりで、ごはんの時だけ起きてくるという感じ。父親役割は果たしたいと思っていました。相当疲れていて、外にも出ず、床屋なども行かず顔も変わってきて、ひげもそらなくなり。麻原彰晃みたいな感じ。・・・「ひげぐらい」とも言えない。買い物して、子供の食事を作ったり。2LDKの小さなアパートだったので、騒がしくしていると夫は眠れなくて。長男を連れて買い物に行ったりして静かにしていました。・・・夕方子供たちが帰ってきたら、そのまま、外に出て行って、2週間ほど帰ってこなかったり。・・・死なないようにと「行ってらっしゃい」と送るだけでした。

夫は、父親として子供たちと接していたが、「理想の父親と現実のギャップ」に耐えられなくなって、自動車に乗って1週間ほど帰宅しないこともよくあった。Aさんとしては一番大切なことは、「母親として子供を育てる」ということだと考え、夫がいなくなっても二人の子育てをしていた。突然家を出てしまっていた夫について安否確認だけは行っていた。その当時、夫は車で寝たり、ホテルに泊まったりしていた。キャッシュカードを持って家を出ていたので、その口座のお金の出入りを確認して、夫の消息を確かめていた。

夫が家を出て行っても、子育てを続けていたAさんの中では、「何があっても子供だけは育てる」という気持ちが強かった。メールを出しても返信が来ない夫のことを考えながら、「生んじった責任ですよ。私が子供を育てる」(涙)だけに専念していたと言う。自分が考える理想の夫、父親になれない夫は、そのジレンマを感じて、暴力をふるうようになっ

てきて、別居を考えるようになったAさんだった。別居するようになったいきさつについて、振り返る。

暴力沙汰があり、4か月で別居しました。もう夫を見捨ててしまいました。もし2年間一緒だったら、私もうつ病になって、子供を殺していたかもしれません。・・・（うつになると）相手に攻撃的になる場合があります。他人のせいにする。うつ病だった友達の話で、高校の時の友達。「自分が寝れないのは子供せいだというようなことがあるよ。旦那さん、一人にしてやった方がいいよ」と言われて、そういうアドバイスもあり、別居することにしました。彼は、「包丁だけは（俺の知らないところに）しまっておいて」と言っていて、「薬を飲むと、自分の行動はコントロールできなくなることもある」と言っていたので、一家惨殺などという事件にならないようにと思って。・・・叩かれたのもあるし、ドアにぶつけられたり、車から引きずり降ろされたり、平手打ちをされたこともあります。「薬のせいだ」と今は考えられるのですが。・・・離れるしかないですね。世間から見たら見捨てたことになるかもしれないのですが、（夫の）親からも言われたし。・・・何もわかってくれる人がいなかった。・・・本当に大変でした（笑い）。・・・切り捨てないと、子供を守れない、自分も守れない。

うつ病のせいで、夫は暴力的になるということは頭の中では理解できたが、突発的な暴力から、自分も子供も守れないと思ったAさんは、別居を決意し実家に戻った。しかし、3週間は実家で暮らしたが、実家にはすでに結婚していた姉家族が同居しており、母親から「出て行ってくれ」と言われ、3週間で実家を出ることになった。また、親からは、「手助けはしないけれどお金は出す」と言われた。

別居中の生活では、実家の両親の財政的援助があった。

・・・その時、働いていませんでした。実家の親は、子供が3歳になるまでは、母親は子供と一緒にいるべきだと考えた人なので、実家から援助をもらっていました。「お金は、あんたが相続するものを貯めておいたので、相続するお金が減る」ということで、生前贈与という形でもらいました。親の援助の下、子供と一緒に。夫の傷病手当も出ていました。

「三つ子の魂100までも」という育児神話を、Aさん、Aさんの両親も共有していたので、長男が3歳になるまでは、実家の両親が財政的援助をしてくれていた。別居中にも夫は、イベントがあるごとに来ていたが、娘と触れ合うこともなくまた消えていった。そんなことがあるごとに、娘は、「他のお父さんは一緒に帰るけれど、なぜ、うちのお父さんは一緒に帰れないの」と言っていた。

そのような別居が2年間続いた。夫はS市の実家に戻った。娘6歳、息子3歳（年少さん）の時にパートで働きだした。別居中は、3か月間連絡取れないこともあったり、半年音信不通の時もあった。

夫の叔父さんに「家族がしっかりしていれば、夫がうつになるようなこともなかった」と言われたこともあり、自分を責めることもあった。心療内科にもかかり、カウンセリングにも通ったけれど、当時のカウンセリングは、患者に焦点を当てるだけで、同じように苦しんでいる家族に対してのケアは全くなかったので、心療内科には行かなくなった。当時のことを振り返って言う。

たぶん、毎日泣いていたと思います。子供起こす前に、まず、泣く。いるはずの人がいないし。ただ、子供が起きてきたら、母親にならなければならないし。・・・私は神になるか、ロボットになるかだと思っていました。・・・当時は、メールしなかったの。ラインだったら、既読はつくけれど。別居した後、3か月ほど音信不通だった。旦那の消息はまったく分かりませんでした。ある日突然、「行ってもいい」と言って、元旦那がやってきたのが再会。けれど、「子供に会うのはつらい」と言って会いませんでした。・・・傷病手当が入った時に旦那の銀行に振り込んでいた・・・「とりあえず生きててよかった」という感じですね。

別居中、一人で子育てをしながら、安定剤など処方された薬の量の3倍以上も飲んでいたこともあった。そのような生活が続き、離婚することを考えた。

2.5 離婚後の生活

2008年10月に離婚を決意した。34歳の時だった。夫と直接会って二人で決めた。

保育園費が高かった。母子手当をもらった方が経済的に楽だった。「お互いに楽になろう」と言って離婚しました。・・・口約束ですが、養育費のことは決めて、彼から養育費をもらい、パートのお金で生活していました。彼の当時の給料は残業もついていて、1000万円だったので、平均したら、7～800万円だったと思います。どのくらいの養育費をもらうということになって、10万円ほどになりました。成人になるまでは養育費を払ってくれるということでした。

2006年頃から営業事務などのパートをして働いた。その後心療内科のパートやほかの営業事務などを行い生活していた。その間にベビーマッサージ、リフレの民間資格を取った。マッサージを2～3年やりながら、息子が保育園から帰る時間が午後4時頃になったので、フルタイムになって働きだした。34歳、2009年だった。35歳までに営業事務。時間給850円で、9時5時のパートになった。離婚した後の仕事について振り返って言う。

仕事中は休憩だと思っていました。子供から離れる時間でした。やることがあるので、いろいろ考えなくて良かった。事務の仕事やっていた時は、お金も発生するし、お礼も言われるしで、幸せでした。帰宅する時には、「本業に戻ります」と言って帰っていました。・・・立ち止まっても何も始まらない。とりあえず、がんばってみようか。ダメだったら、辞める。何を守りたいのか。・・・自分が壊れることだけはやめよう。・・・自分が守りたいことは子供たちなので。

近所の病院に行っていた時に、その病院の看護師から、「看護師になれば、食べていけるよ」とアドバイスを受けた。助成金を受けて、大学に行っている友達もいた。営業事務は、38歳まで続けており、時給850円ほどだったので、養育費（10万円程度、必ずしも毎月振り込まれるわけではなかった）、パートの仕事をしながら、預金を取り崩しながら生活できていた。離婚したことで母子手当（5万円）などももらっていた。母子家庭になり失業をした場合には、母子家庭の特別ハローワーク（マザーズ・ハローワーク）が役所にあり、そこで「高等技能（職業）訓練促進費制度」を知り、看護師になるために看護専門学校に行く決意をした。毎月10万円の助成金をもらい学校に通うことを計画した。返金不要の助成金だった。娘が中1、息子が小学4年の時だった。フルタイムで派遣社員をしながら、受験勉強をしていた。看護師になるためには、さまざまな学校があったが、Aさんは費用の高い大学の看護学部ではなく、費用が安い公立の看護専門学校（年間15万円程度の授業料）を受験した。社会人枠ではなく、一般受験をして合格し、入学することができた。38歳の時であった。当時「高等技能（職業）訓練促進費制度」が変わり、促進費は2年間しかなかったので、1年間は、実家からの援助を得て2016年3月41歳で卒業することができた。

両親は看護師に対して職業差別意識があって反対する人たちだったので、合格してから報告した。助成金10万、母子手当5万円、養育費10万で生活していた。子供の学用品を買うお金を申請することができていた。娘が中学1年生だったので、「一緒にテスト勉強できるね」と一緒に勉強することもあった。看護専門学校で勉強していた頃、1学期だけBを一つ取ったが、他はほぼすべて、AあるいはSを取っていた。「学校ではせめて上に立ちたい」と思い頑張っていた。看護学生であるけれども、Aさんは子供にとっては母親だと思い、「子供が起きている時には、教科書を開けることは全くなかった」という生活をしていた。

看護専門学校に行く準備をしていた時に、小学校の子供会活動もしていた。1年から6年まで26名しかいない少人数の地区で、すぐに役員が回ってくることが予想されたので、それを考慮して、長女が6年生の時に子供会の会長をやっていた。会長はいったんやれば二度とやる必要がない。それに会長は、休日だけでいい。看護専門学校3年生の時に、長男が小学6年で会長をやらなくてよいと考えたからだった。

2.6 看護師として働き始めて

看護師の資格を取得し、2016年4月から市民病院で働き始めた。看護師の仕事はハードだっ

たし、看護主任が厳しい人だった。その人間関係が要因になり、睡眠障害が起こって、精神科に通い診断書を受け取り、職場を1年間で退職した。最初の病院で働いていた頃について振り返って言う。

16時間夜勤や前残業があり、3時に出て次の日の9時半まで勤務。ただ、すぐに帰られるわけではないので、帰りは10時半ごろでした。過度な負荷をかけられることもあります。子供たちのために、その夜ごはん、次の朝のごはんの準備をしなければならなかったです。・・・5時半から院内研修があった場合、9時半ごろに職場を出るという生活。そういう生活では失敗もしました。そのことを責められる。そして眠れなくなる。そうすると娘から留守電が入っている。「おなかが空いた」という電話が入ったりする。「私は何のために働いているのか」と思い、それが永遠に続くと思うと・・・体も心もボロボロで。

肉体的にも精神的に疲れていたAさんはこの働き方に疑問を持ち始めた。

何に価値を置くからが重要だと思うんですね。夜勤などもあり大変な勤務でした。私は、子供の弁当づくりをしたい人だったので、・・・24時間一緒にいて、365日間一緒にいた娘を大切にしたいと思う気持ちが今もあります。

子育てをしっかりとする母親として生きることには価値を置くAさんだったので、この病院を辞めた。

母親として生きることが出来る職場を考え、2017年4月から老人福祉を中心としたケアハウスに勤め始めた。その施設の理事長は、「医療的措置をお金儲けだ」と考える人物でその経営理念に不満を覚えた。過度の医療で、患者を長生きさせることでお金を儲けていた。それに加えて、辞めたのには経済的な理由もあった。

前の職場を辞めたのは、理事長のやり方が自分の信念に合わなかったということもありますが、もし、500万円もらっていたら、それは悩んでいたと思います。「悪魔に魂を売った」と思えば、それはそれで生活できるじゃあないですか。「ただ、この給料でそこまでやりたくない」と思いました。

医療者が人の命を伸ばしお金儲けをしている現実と直面しながら、「人道的看護師」として生きたいと思い、2年間3か月働いたケアハウスを辞めた。そして、2019年8月から、「自然な看取りをしたい」と考え、「特別養護老人施設」に勤め始めた。しかし、2019年11月の段階でまた、退職するかどうか悩んでいた。厳しい上司との人間関係が原因であると言っていた。

元夫は子供たちにとっては父親ということで、子供のイベントがある時には、遊びに来ている。自宅に泊まることもある。Aさんとしては、いろいろな感情を抑え、「神になるか、ロボットになるか」の気持ちで、家族旅行なども行っている。しかし、元夫の親族との関係は今もなお悪い関係にあると言う。元夫がうつ病になった時に、義母に「あんたがそんな状態だから息子がうつになった」と罵倒されたこともあった。また、義母は、元夫をまだ子供扱いをしている人で、元夫から子離れしていない人だった。Aさんが言うには、その意味で元夫は、「アダルトチルドレン」と呼べるほど、母親から自立できていなかった。2018年に元夫と義母、義父がAさんの息子の部活大会に応援にやってきた。その姿を見たAさんに、突然、「過呼吸」が起こるほどであった。高校3年生の娘は、「お母さん、泣いてもいいから過呼吸は止めよう」と言って介護をしてくれたほどであった。その頃、元夫に彼女ができたことも発覚した時期も重なり、その過呼吸の要因でもあった。

今もまだ元夫に心が残っている状態だとAさんは言う。なぜうつ病になり暴力をふるうような元夫に心が残っているのでしょうか。

生きているか死んでいるかわからなかった時ですかね。・・・なんでかな、友達に「なんで旦那さん、旦那さんどこが好きなの」と聞かれて。「その時、すべてだった」と。アトピーの時もそうだし、実家の時もそうだけれど、私の親は毒親だったし。・・・離婚する前まで、救われたことかな。・・・自分を救ってくれたのは彼なので。劇的な出会いがあれば別だけど。もし今の彼女と別れることがあれば、待っているというのは今の私の気持ち。

当時、「この子供たちがいなければ、女として旦那についていっただろう」と言う。しかし、母親として、子供たちの命を守ることが子供たちを育てることが一番大切だと考えている。精神的命、肉体的命の両方を守ることが母親の役割だと考えている。「それは産んでしまったことの責任ですね」とも繰り返して言う。

2.7 Aさんを支えている人たち

母子家庭は経済的に困難な状態にあり忙しくなり、孤立する傾向があると言われることが多い。しかし、Aさんの話を聞いていると、孤立の問題は、「ワンオペ育児」時期だけだったように思える。ではその後、彼女をサポートする人間関係はどのようなものであったかについて、3回目のインタビュー後、メールで尋ねた。筆者のそのメールでの質問は「今心開いて話できる友達がいると思います。特に、理解してくれるであろう、母子家庭の友達などがあると思います。その人たちとの関係について教えてください。この点については一部話を聞いたと思いますが、あえて、もう一度教えてください」というものであった。それに対して、Aさんが回答してきたメールの内容を引用する形で描写し、簡単なコメントを付け加え、Aさんがどのような友達のサポートを受け、母子家庭として生きているかについて

考察してみたい。

まず、メールの最初に「現在、心を開いて話のできる友人は片手ほどいますが、母子家庭は1人だけです」という前書きを書き、それぞれの人物について説明した。母子家庭同士が理解し合い、互いにサポートしているのではないかという筆者の仮説は部分的にしか当てはまらなかった。

まず、最初の人は、Aさんとほぼ同年代の薬剤師のEさんで、彼女について以下のように書いている。

娘を妊娠中に知り合った薬剤師のEさん。44歳。今は薬剤師として正社員でバリバリに働いています。近くに住んでいた頃は仕事してなくて、よく行き来していました。彼女の旦那さんも帰りが遅く、“収入の安定した母子家庭”と2人で自称していました。遊ぶときはだいたいどちらかの家で夕飯、お風呂を済ませていました。数年後に京都に帰ってしまいましたが、その時はEさんロスで泣いていました。電話で話すことはしょっちゅう、年に数回は京都、F市を行き来し、子どもたちと一緒に遊んでいました。現在は2～3ヶ月に1度くらいのペースで神社めぐり御朱印集め友達です。医療従事者としての良き相談相手でもある、20年来の友人です。何を話しても、後でお互いの発言が気になることがまったくない無二の友人です。それでも、元旦那のことを素直に話せたのは、ほんの1～2ヶ月前のこと。子どもにお金がかからなくなったら、海外旅行に行こうと約束しています。

帰宅の遅い夫を持つEさんは、Aさんが「ワンオペ育児」をしていた時に知り合い、その時からの付き合いである。同じ育児を経験した気持ちを共有できた関係だった。

2人目は、長男の4か月検診で知り合ったGさん。元夫がうつ病になり別居する前からの付き合いである。

息子の4ヶ月検診で知り合ったGさん。48歳。お姉ちゃん同士も同級生で、元旦那のうつ病発症前からの友人です。別居時はどちらかの家で夕食を一緒に作って食べたり、お風呂に入ったりしていました。子どもたちの相性がよく、お互いに家事・育児の助け合いができました。お泊りもよくしていました。旦那さんもとていい人で、お互いの子がよその子の気がしない関係です。息子たちが中学で同じテニス部に入り多くの時間を親子ともに過ごしましたが、価値観の相違を感じることも多々あり、ここ1年は若干疎遠になっていました。最近関係が復活しました。本当に大変だった時期に一番身近にいてくれて助けてくれた友人です。出会ってから離婚に至るまで、その後の私の悩みや抱えていた思いはつい最近までほとんど話さないまま16年友達していました。上のお姉ちゃんは看護大学に進学し、お姉ちゃん同士の関係も幼稚園からずっと続いています。このままいくと、老後はご近所さ

んでの助け合い♡な関係になる気がしています。この一家に足を向けて寝ることはできないと思っています。

出会いが偶然だったが、家族構成が似ていた友人で、離婚に至るまでの別居中の大変な時期に一番身近にいてサポートしてくれた女性であった。

3人目は、前職で知り合った医師のHさんであった。

前職場で知り合った医師のH先生。50歳。お互い退職してからの方が関係は深くなり、現在は月1ペースでランチやカラオケに行ったりする仲です。H先生が退職直前にうつ病（現在は回復）になったこともあり、かなり鋭い視点で自己・他者分析される才女です。現在は無職で、3月までは長女の大学受験に付いて全国を飛び回る予定らしく、資格職でありながら子ども優先で仕事を選択しているあたりに共感を覚えます。おそらく、本質的なところで似た部分がある上、職場で起こる事件の内容やタイミングが奇妙にリンクすることあっても一番最初に多くを話した人でした。

医師と看護師が対等な形で友人になることは想像できなかったが、Aさんの鋭い感性と共通したものを持っている女性として友人関係になれているのであろう。多くのことを深く話せる女性として、Aさんにはなくてはならない人になっているようだ。

4人目は、Aさんが看護師になってからの友人Iさんで、同じ病院をほぼ同時に辞めたことでも看護師として働いた共通の経験が二人の関係を結び付けているようだ。

看護師になって初めて働いた市民病院での同期。35歳。社会人経験、家事・育児をしながら看護師資格取得した経歴を持つため、共感できる部分も多い。彼女は2歳の長男の子育てをしながら資格取得している。市民病院に勤めていた頃、ほぼ同じタイミングでパワハラ上司にやられてしまい、休職になったことが親しくなったきっかけだった。彼女はその後退職し、事務職につくほど、看護職に嫌気がさしてしまっていた。私の現職場での経緯を聞き、強く一旦看護職から離れることを勧めた友人だった。彼女の名言。「Aちゃん、しばらく看護職離れて、男女比率が普通の職場で、人間扱いされた方が絶対いいよ。学生時代から看護師に囲まれてるから麻痺してるけど、異様な世界だから」看護師としての意見交換、アドバイスし合える関係。ふたりとも看護師感の薄い、ただの大卒のおばさん感是否めない。元旦那とのことは話していない。

元夫とのことは話さないが、同じように社会人経験をした後、育児をしながら看護師資格を取得したという共通体験があるので、Aさんの看護師職についての葛藤は理解してくれる

女性である。

5人目は、看護時代の恩師に当たるが、年齢が同じということで友人関係になっているJさんである。Jさんがメンタル不調の時に、Aさんがサポートしたことで、Aさんもまたサポートされている関係である。

看護学校の時の教員、年齢は同級生。学生時代には担任、実習担当教員だったこともあり、ハンドマッサージに興味を示してくれていた。彼女のおかげで、卒業後にハンドトリートメント講座を3年生対象に年1回1コマ受け持たせてもらっている。1年ほど前からランチに行くようになった。彼女が今年3月～11月までメンタル不調で休職していた。担任として離婚・進学の間緯を知っており、回復期に少しずつ外に出るお手伝いをさせてもらった感じ。10月以降はほとんど回復していたので、元旦那との愚痴や娘の状態などの相談に乗ってもらっていた。

6人目の友人は唯一母子家庭の母親であるKさん。Kさんとは同じ大学出身で育った家庭環境、今の家族関係も似ていることが共通している点が二人の関係の基本にあるが、Kさんが夫と死別し母子家庭になったことで友人関係が復活したという女性である。

L大での同窓生。言語学専攻していたため、M先生（筆者）との面識はほとんどありません。彼女は8歳年上だった元公務員の旦那さんと昨年死別しています。現在は父親の経営する会社で事務（正社員）を手伝いながら、他でもパート勤務しています。生活には全く困っておらず、働くのは、ずっと家にいることが苦痛だから。お嬢様度と世間知らず度が似ている。子どもは3人（大学2年の長女、高校2年の次女、中学3年の長男）子育ての悩み、独り身の寂しさ、母子家庭あるあるが共感できる仲間。お互い第1子出産後2～3回遊んだことがあったが、その後はほとんど年賀状のみの関係。専門学校3年の夏休みに、久しぶりに連絡し再会したが、私の仕事が忙しくなり、再び疎遠に。旦那さんが亡くなって49日の法要が過ぎた頃にたまたま私が連絡したのがきっかけで、現在は最も多く連絡を取り合う仲になっている。

母子家庭で独り身である人にしか共感できない感覚があるとするならば、かつての大学の友人であるKさんが母子家庭になったことで共感し合える友人になり、日常的に交流できる関係になっている。

以上、Aさんにとっての友人と呼べる6人は出会いも関係性も異なるがAさんをさまざまな面でサポートする役割を果たしているようである。一般的に母子家庭になり、さまざまな社会的偏見のまなざしにさらされる傾向があるが、Aさんの場合、個人的な出会いから日常的な交流ができる関係を作ることができている。そのような人間関係のネットワークに

よって、Aさんは活発で元気なお母さんでいられるのかもしれない。

2.8 今の心境

Aさんの大変だった頃の話聞き、筆者は今のAさんの心境について聞いてみた。Aさんはその質問に答えて言う。

この数年間、動いていたのですが、人生で絶望するということというのはこういうことなんだと思っていました。人生に絶望したのではなく、自分に絶望していました。・・・親としても、娘として、嫁として、どこまでも出来が悪い（笑い）。・・・幸せのハードルを下げていかないと生きていけないし、子供を殺さなければオッケイということで。・・・子供なんか、米炊いて、塩を与えておけば生きていけると思うし。・・・紙一重。何一つ思い通りにならないと思っていた時もあります。

人生に絶望するのではなく、「自分に絶望してました」と言うAさんは、小さい頃から「自己肯定感」を持つことが出来なかったことによるのであろうか、と思われた。Aさんは続けて言う。

ドツボはどこだったのだろう。う～ん、どこなんだろう。一番のドツボか。・・・私は人生は修行だと考えているのですが、一番怖いのは、「下流老人」ⁱⁱⁱになることです。産んじゃった責任で、「子供たちが生きててよかった」と思える人生を送ってほしいと願うだけです。・・・今ある自分が嫌いじゃないですか。自己肯定感が低くならないように、と思って、無理してごはん作った方が、自己肯定感が上がるから、食事を作っている。

母親としての役割をすることで、「自己肯定感」を下げないようにしているAさんであるが、将来一番怖いのは「下流老人」になることだと言って、経済的安定を図るために、看護師として働くことを選んでいる。しかし、病院での勤務で看護師として働くことの厳しさを経験し、老人福祉施設での理不尽な看護の在り方に疑問を持ち辞めている。そして今、自然な看取りが出来る施設で看護師として働いているが、その同僚である看護師たちの厳しい態度に、このまま看護師として働くことに疑問を持ち始めていた（2019年11月の時点）。将来的に「下流老人」にならないためには、看護師として働き続けることがベストだと思っているが、葛藤を持っている。

母子家庭の母親としての生き方で一番つらかったことは、他の人が理解してくれないということであると言う。

私本当に黙っていたのです（涙）。話す以上、わかってもらいたい（涙）、人間だけ

ら。自己開示した以上、わかってほしいと。相手に対する甘えですね。自己肯定感がどん底だった時、自己肯定感が低い時に、他人の批判を受けるキャパがなかった。・・・貝になっていた方が楽だと、・・・この辛かった時に出会った人、すごく支えてくれた人がいるんです。

自分が辛いと思っている気持ちを姉などに言った時は、姉の反応を聞いて、「理解されていない」と感じる事が辛かったと言う。だから、自分の心の中にある辛い気持ちや淋しい気持ちなどは表に出さず、「貝」になることが多いと言う。しかし、別居中、離婚後、看護学校在籍中、職場で出会った友達はさまざまな面で支えてもらったと思い、感謝している。

今怖いことは、経済的な不安である「下流老人」になること。まだ、40歳代だから再婚の可能性があるか聞いてみた。それに答えて言う。

再婚する気がまったくないので。子供の父親は彼しかないないので、新しい父親はいらない。子供の傷になる。今私が考えているのは、子供ことだけを考えていたので。私は子供とべったりしたい人間なので、今は、子供が離れていくのは淋しい。

息子が高校1年生、娘が看護専門学校の1年生。それぞれが友達を作り、母親であるAさんから距離を持つこともある。食事自分たちで食べることが出来る年齢にもなった。Aさんがもっとも淋しいと感じるのは、子供たちが自分から巣立っていくことだと言う。「産んだ責任」で子育てを中心に生きてきたAさんには今後どのような未来があるのだろうか。それが母子家庭の母親として生きたAさんの問題であると同時に、母親として子育て中心に生きたすべての母親に共通する問題なのかもしれない。

3. 考察

AさんのライフストーリーをAさん自身の語りを中心に引用し、描写してきた。母子家庭の母親として生きるAさんの経験は一般的な母子家庭の母親の中でどのような位置づけになるかをまず論じてみたい。

まず、母子家庭になった女性の学歴を見てみる。平成28年度『全国ひとり親世帯等調査結果報告』によると、中学卒業が11.5%、高校卒業が44.8%、大学・大学院卒は9.1%である。Aさんは母子家庭になった女性の中では、10人に1人以下の割合の高学歴の女性である。大学進学する時に短大ではなく、4年制大学をめざすほど学びへの意識の高い女性であった。Aさんが高校を卒業した平成7年の女性の大学進学率(平成28年版の男女共同参画白書(内閣府男女参画局))は、同世代の進学率が22.9%であることを考えても、高学歴を目指す女性であった。そのようなAさんであるので、友達から聞いた「高等技能(職業)訓練促進費制度」を利用して、看護専門学校の受験を考え、「社会人受験でなく、一般受験で」看護

専門学校に38歳で入学し41歳で卒業することができた。赤石（2019年：189-190）が指摘しているように、「高等技能（職業）訓練促進費制度」の2011年度の総支給数は、1万287件で、その内訳は、1105人が看護師、准看護師1377人、介護福祉士247人、保育士143人である。Aさんは、看護学校などに入学できる人は勉強ができ意欲のある限られた層の一人として看護師の国家試験に合格した。勉強ができ意欲的で看護学校在学中の成績もほとんどAあるいはSをとっていたAさんは、母子家庭の女性としては、看護学校の学生の中でもきわめて勉強意欲のあった女性だったと言える。藤田（2017年：88-91）はその著書の中で、医療系資格の専門学校をめざそうとしたシングルマザー伊藤さん（30代）について言及している。契約社員として解雇された伊藤さんは、手に職をつけようと医療系資格の専門学校に入学することを考えたが、お金の問題で諦めた。伊藤さんとAさんの違いを考えてみる。Aさんは、知り合いから「高等技能（職業）訓練促進費制度」について聞くことができた。伊藤さんの場合は、社会的ネットワークあるいは社会的資源を利用して、この制度について知ることができなかった。また、Aさんの両親は、Aさんに対して、必ずしも精神的サポートをしてくれなかったが、子供のためには、財政的援助をしてくれる人たちだったので、看護学校の入学が決まってから、看護学校の3年分の授業料で、当時、この制度でカバーできなかった1年分の授業料の120万円を「生前贈与」としてAさんに援助してくれた。困った時に、援助してくれる社会的資源の差が、伊藤さんとAさんの違いを生み出していたと言える。

一般的な母子家庭で養育費を受け取っている世帯は、厚生労働省「全国母子世帯等調査結果報告」（2011年度）で、「養育費の取り決めをしている」が37.7%で、4年以降は15.6%になっているのが全国的な現状であるが、Aさんの場合は、毎月とは限らないが子供2人に対して養育費を10万円受け取っている。平均的な母子家庭よりもはるかに経済的に安定していると言える。

しかし、母子家庭の女性に取材を行い『ルポ母子家庭』を書いているジャーナリストである小林（2015年）が指摘するように、長男が3歳になるまでは実家からの援助をもらっていた後は、子育てをしている女性に対して厳しい雇用状況の中で、派遣やアルバイトをしながら生きざるを得なかった。しかし、Aさんは看護師になってからは、正規職として働くことができています。シングルマザー（母子家庭）の貧困問題を日本の社会問題として、研究者の視点から調査した水無田（2014年）は、シングルマザーに聞き取り調査を行い、シングルマザーたちが置かれている状況について分析を行い、今日の日本社会の問題を論じている。貧困の問題を中心に論じた本の最後に、水無田（2014年：257）の「おわりに」で、インタビューで出会ったシングルマザーたちは、「パワフルで魅力的な女性たちばかりであった。その魅力の一端をお伝えすることができたならば、幸いである」と書き、離婚や未婚の母を選択した彼女たちはみな「子どものために」の選択をしたという印象を強く持ったと書いている。Aさんもまた、「パワフルな女性」として、「子どものために」と生きてきた女性であると言える。

相対的に恵まれた母子家庭の母親である A さんであるが、離婚をして母子家庭の母親として生きていくことで生じるさまざまな困難は彼女のライフストーリーから読み取ることができる。ここから一人の女性が離婚し、母子家庭の母親になったことで直面する問題を彼女自身の語りから読み解くことにする。

まず、A さんは他の母子家庭の女性と同じほどの厳しい経済的困難には直面していないが、子育てをしながら女性として働くことの難しさを経験してきた。そして、A さんが何度も繰り返して言っていた、「私は下流老人だけにはなりたくないです」と、家族を養い、最終的には一人で生きることに伴う財政的な予期不安を持っている。その不安を軽減するために、意欲的に勉強し、看護師という国家資格を取得し、ある程度の経済的安定を確保する生活の仕方をこの数年始めている。

次に、日本における雇用慣行と伝統的な性役割が A さんの結婚生活に困難を生み出す要因になったのではないと言える。A さんの元夫が働いていた職場では、上司が元夫に「家庭生活のことは諦めなさい」と言うほど、男性は仕事優先で家庭を妻に任せることが当然の常識になっている日本の会社の雇用慣行がある。濱口（2016 年）は、そのような日本的雇用慣行を「メンバーシップ型」と呼び、西欧諸国で一般的な「ジョブ型」雇用と区別している。特定の能力を持つ人を特定の職務を遂行させるために採用している「ジョブ型社会」である欧米とは異なり、「メンバーシップ型社会」の日本は、正社員は一旦入社したら、様々な業務をこなし、部署の配置転換をしながら、昇進していくというシステムである。「メンバーシップ型」に基づいた日本型雇用慣行におけるワークライフバランス分業では、男性正社員は無制限な労働時間を働くことによって、家庭の妻と子供を養う生活給を受け取るシステムになっている。その意味で、A さんの元夫の上司や男性正社員にとって時間制限のない労働は当然ことだった。

しかし、毎日、午前 1～2 時まで働かざるを得なかった元夫の職場は、その「メンバーシップ型」の職場としても極端な場合で、まさに、「ブラック」な職場と言えるものである。元夫は、それを拒否するのではなく、忠実な労働者として責務と役割を果たして、「家族を養うため」にやっていたのかもしれない。しかし、そのような働きぶりは、妻であり母親である A さんに「ワンオペ育児」を強いることになる。そして、A さんの元夫は、「密室育児」「ワンオペ育児」の大変さを理解しようとする想像力を欠き、経済的役割である男性役割だけに専念し、仕事だけを行うことでいいと考えることの問題を感じることはなかった。「ワンオペ育児」は単に A さんだけの問題ではなく、働くことだけに専念する夫を持つほとんどの女性に当てはまることである。藤田（2017 年）は首都圏の 30～40 代の幼い子を育てている女性たちとその周囲にいる人たちを観察し、聞き取りをした結果を『ワンオペ育児—わかってほしい休めない日常』としてまとめている。そこには、朝 6 時から深夜 1 まで休みなく家事・育児をこなすさまざまな女性たちの姿が描かれている。A さんもそのような人の一人であった。

A さんの場合、「毒親」に育てられ、「自己肯定感」が持てなかったという強い思いがあり、

母親として、娘に「自己肯定感」を与えるために、「ずっと娘を抱いていた」し、娘の「命を預かって」愛情ある人間に育てるために育児に没頭し、夫へのケアをすることはなかったようだった。ただし、同時に、夫のケアをしなかったことを反省的に捉えていた A さんだったが、藤田（2017 年：67-72）が指摘しているように、「家族はしんどくて会社はくつろげる」逆現象があるのかもしれない。そのような夫は、仕事を終えてもなお職場に続けることで、育児の分担を避ける傾向があると言う。その意味では、夫のケアをしなかった A さんは自己反省をする必要ないのかもしれない。A さんの当時の葛藤の根源は、育児は「命を預かっている」母親の仕事とする「伝統的性役割」と夫の会社の仕事中心主義を基本として日本の雇用慣行の間にある相互関係がうまく機能しなかったことによるのであろう。

第 3 に、元夫がうつになったことで、「最愛の夫」が「暴力夫」に変化してしまったことで、長い別居の後、離婚することになる。A さんの語りを聞いていると、元夫への愛情がいろいろな点を感じることができる。また、元夫は「うつ病」や薬のせいで、以前の夫でなくなったということは頭の中では理解できたと言う。しかし、突然失踪して家に帰ることがない夫、時には、暴力的になる夫に耐えられなくなったのであろう。内閣府男女共同参画局「男女行動参画白書平成 25 年度版」によれば、妻の方の離婚の理由として、第 1 は、「性格が合わない」43.6%だが、第 2 として「暴力を振るう」28.8%になっている。うつ病や薬が夫を暴力的にさせているのではないかと思っても、突発的な暴力にさらされて、「切り捨てないと、子供を守れない、自分も守れない」と思う「子供のために」生きることを基本とする A さんの思いがあり、別居し、実家に戻るようになった。

第 4 として、A さんの苦しみの要因は、他人、特に、親や親戚が A さんのことを理解してくれないことだった。暴力的な夫から逃げ実家に戻ったが、すでに姉家族が両親と同居していて、母親から「出て行ってくれ」と言われ、3 週間で実家を出ることになった。このようなことは、木村（2015 年：70）が指摘している別の事例にもみられるように、「夫と離婚してから実家に戻ったが、父親は沢田さんを厄介者扱いした。孫も可愛がってくれなかった。実の親が一番冷たかった。妹も同居しており、沢田さんと子どもたちが転がり込むように戻ってきたためだ。シングルマザーになると友人は手のひらを返したようにいなくなり、ほぼ全員が去っていった」。離婚していない友人には理解されることがなく孤独感を感じることでよくあることで、A さんの場合、「私本当に黙っていたのです（涙）。話す以上、わかってもらいたい（涙）、人間だから。自己開示した以上、わかってほしいと。・・・貝になっていた方が楽だと、・・・この辛かった時に出会った人、すごく支えてくれた人がいるんです」とインタビューで語っている。そして、つらい時に出会った新しい友人が心の支えになり、離婚前と離婚後では大きく人間関係が変化した。

第 5 に A さん自身の自己意識としてある「自己肯定感が低い」ということが、A さんの原動力の源になっていると解釈できるのではないかと。「自己肯定感が低い」から、他人に対しては、笑顔で接する行動をして、いつも元気でいようとする。怠け心が出てきた時でさえ、「自己肯定感」を上げるために、家事を丁寧に行う、人を喜ばせる行動をするのではないだ

ろうか。他人の評価を意識するからこそ、より高い評価を求めて行動せざるを得ない行動になり、時には、疲れてボロボロになる傾向があったが、それでもパワフルな女性として、子どものためにと生きてこられたのかもしれない。

第6に、Aさんの交友関係を聞くと、サポートを必要としている時に、さまざまな出会いがあり、Aさんは、母子家庭にありがちな社会的孤立を避けることができてきた。そのような社会的ネットワーク、社会的資源は母子家庭として生きる女性には必要不可欠である。財政的な支援に目を向けることは重要であるが、Aさんが持っているような社会的ネットワークが彼女を救うことになっているのであろう。赤石（2019年：202-243）が政策的、社会保障的、経済的な多様な支援活動を提唱しているように、母子家庭の女性たちは、母子家庭の女性たちと互いにサポートしあいながら生活することの重要性は、経済的に困窮している母子家庭には必要であるが、Aさんのように、ある程度経済的に独立できる場合には、多様な人間関係を作ることで、母子家庭であることから受ける否定的なまなざしに関係なく、積極的に生きることができるのかもしれない。

最後に、看護師として働きだしているAさんの困難は、看護師の働く職場におけるワークライフバランスの問題である。看護の現場は過酷な現場である。激務の市民病院と理不尽なケアハウスを辞めてから2019年8月に、「自然な看取りをしたい」と考え、「特別養護老人施設」に勤め始めたが、厳しい上司との人間関係が原因で退職することになり、2020年1月からは、保育園内に常駐する看護師になり、子育てに関わるゆったりとした就職先に決めた（2019年12月28日の段階）と言っていた。看護師資格を取って働きだして、4年になるが、これで、3回の転職をして4度目の職場になる。子育てを中心に生きてきたAさんにとっては、母親として、家庭を犠牲にすることのない職場への就職の決断であった。国家資格である看護師、需要の多い看護師であるからできる転職であるかもしれない。将来「下流老人」にならないためにどのような職場を選ぶかは、Aさんの今後の課題になるであろう。

4. 結論

母子家庭は、日本の貧困問題、ジェンダー問題、雇用慣行、また、社会福祉政策、社会保障の問題として最近さまざまな研究が行われ、母子家庭という社会問題の現状を明らかにし、その問題解決策がさまざまな形で提言されている。母子家庭を社会問題としてそのように研究することの重要性は大いにあるが、本稿は、ライフストーリー研究として、母子家庭の一人の母親のライフストーリー・インタビューを行い、彼女の語りに耳を傾けた。Aさんのライフストーリーの考察をすることによって、一般的な母子家庭の問題として経済問題が根本的な問題であるが、Aさんの場合、その問題に不安は感じるものの、経済問題がAさんを苦しめる根本的な問題になっているわけではないことが明らかになった。それにもかかわらず、母子家庭の母親として生きることの困難さが彼女の語りから読み取ることができた。そのような困難さとは、日本の雇用慣行と伝統的性役割、そこに起因する「ワンオペ育児」、

離婚し母子家庭になった女性に対する社会一般、職場、そして、親族からの否定的なまなざし、そこから生じる社会的孤立の問題などがそれにあたる。それに対して、Aさんの個人的な戦略的対応として、変化し改善されつつある社会保障と福祉政策の情報を積極的にアクセスし利用したこと、また、経済的に援助してくれた両親という社会資源、さらに、Aさんが出会った友人というネットワークが効果的に使って、貧困や社会的孤立を回避することができている。このような点が明らかになったのは、具体的な経験についてのAさんの主観的語りを描写し、分析したからであろう。このような母子家庭の女性に関わる経済問題とは異なる困難さを理解し共有することによって、母子家庭の問題を社会問題として対象化し、区別し、「普通でないもの」と見なす否定的なまなざしを軽減することが可能になるであろう。また、母子家庭の母親のライフストーリー研究によって、母子家庭を社会問題化し、「普通でないもの」と見なす（時には、上目線からの同情する）視点でなく、彼女たちの生活世界を彼女たち自身の語りを理解し、水無田（2014年：129）「離婚は家族を壊す、という定型句のように言われるが、少なくとも聞き取り調査をする中で実感したのは、それぞれのシングルマザーのみなさんの、子どもへの深い愛情であった」という母子家庭の母親への敬意と共感の視点を構築することが可能になるのではないだろうか。

次に、本研究の限界と課題について述べる。本研究は、大学で勤めている筆者が元ゼミの女性たちがその後どのようなライフコースを経ているかという研究テーマで、卒業生にインタビューを行い、彼女たちの多様な生き方を描写し、分析することで、今在学している大学生たちにキャリアを考えるヒントを与えることができるのではないかという目的で始めた。その研究の中で、偶然、Aさんが母子家庭の母親として生きているということを知り、母子家庭の現実を理解したいと思い、Aさんのライフストーリーを聞き、本人の語りを中心に描写し、論じた。その結果、母子家庭の母親としては、さまざまな面で社会的に優位にある状況を描写することになった。本文でも指摘しているが、母子家庭の女性の多くは、学歴が低く、Aさんのように大学卒の女性は1割程度である。また、Aさんの両親の社会・経済的地位は、「生前贈与」として、Aさんにさまざまな経済的援助が出来る状況にあり、多くの母子家庭の女性が直面している貧困を同じレベルでは経験していない。その意味では、本稿は、湯沢（2009年）や神原（2007年）が議論している貧困の世代間の再生産や社会的排除の問題には全く言及していない。また、さまざまな研究者（赤石 2019年、小林 2015年、水無田 2014年）が母子家庭と貧困の密接な関係について論じ、母子家庭が置かれて社会状況を改善するための政策的提言しているが、本稿はそのような改善策の提言も行っていない。今後、社会階層、教育レベルの低い母子家庭の女性に焦点をあて、Aさんのライフストーリー研究での知見が一般的な母子家庭の女性にどれだけ当てはまるのかを考察することが今後の課題である。

以上のような研究枠組みの限界を持ちながらも、本研究の意義があるとするならば、母子家庭の母親として生きることに伴う、否定的社会的なまなざしや孤立の問題は、貧困とは密接にかかわっているものの、その人の社会階層や教育レベルに関係なく存在しており、その問

題の解決として、社会的資源やネットワーク資源が人として生きる時に有効的であると示したことであろう。それは単なる「自助努力」の推進という新自由主義が提唱するものではなく、人として、理解してくれる他者と共感して意欲的に生きることの重要性を意味している。その意味で、Aさんのライフストーリーはどのような状況でもパワフルに、元気に生きることが出来る一つの可能性を示していると言える。

最後に、インタビュー方法論的枠組みとしては、「対話的構築主義」に基づき、インタビューで語られた語りは、インタビュー対象者とインタビュアーの共同作品として構築されたものであると筆者は考えているが、その構築された語りを詳細に描写し、分析することは、果たしてどのような意味があったのであろうかという問いを考えてみたい。アトキンソン（2006年）が指摘しているように、語り手が自らの経験をストーリーとして語ることで、語り手の過去の経験に現在の視点から再解釈を与えたり、意味付与を行ったり、自己理解を含める効果があるのではないかなと言えるであろう。その意味では、対話的インタビューという場面で本人が語ることを通して、自らをエンパワーし、それまでの考え方から解放される可能性があるのではないかと思われる。筆者がライフヒストリー・インタビューを3回終え、Aさんのライフストーリーを文章にまとめて送った時に次のような質問をした。「このインタビューをして、色々なことを話してもらいました。私自身も話して。そのことで何かポジティブな変化ありますか。無理やり考える必要はありません。正直どうですか」と。このメールへの返事として、Aさんから以下のような返信をもらった。

ポジティブな変化はいくつもありました。一番大きな変化は、M先生（筆者）にいろんな感情を表出し、時系列的で私のライフヒストリーを聴いてもらったおかげで、これまでの私を支えてくれていた大切な友達にも、本当は話したかったことが話せるようになりました。「理解困難・・・」という反応を示されることも度々ありますが、その反応も肯定的に受け止められるようになった自分に気づきました。

まだ発展途上ですが、自分が楽しいと思えることをして生きていく、仕事していくという視点で物事を考える機会にもなりました。いかに“べき論”で生きてきたかの再確認でした(笑)。インタビュー期間にも元旦那とのさまざまなトラブルあり、そこも含めて聴いてもらえ、彼に対する自分の思いや今現在の彼について少しは客観的に考えることができるようになった気もしています。子供たちとの関係や子育てに対しても、M先生のフィードバックによって客観的な理解が深まったと思っています。

研究の方法でも書いているが、最初の予定では、母子家庭の母親のライフストーリーというテーマで、8月26日の1回だけのインタビューを計画していたが、その後、ライフストーリー・インタビューという形というよりは、質問を兼ねた雑談形式のインタビューを2回行った。その結果、8月から11月までの継続的なインタビューになった。その間に上のメール

に書かれたような「ポジティブな」変化があったと本人から返信が来た。それは、運動という集団行動を通して女性の地位向上をめざしたフェミニズム運動によく言われたエンパワメント的機能から生じた自己解放とは異なるかもしれないが、アトキンソンが言うように、Aさんは、自らのライフストーリーを筆者に語ることによって、自らの人生の経験を再解釈し「いかに、“べき論”で生きたの再確認でした（笑い）」と考えるようになり、他者に対する態度も変化させることができ、「それまでのAさん」からの解放になり「自分が楽しいと思えることをして生きていく、仕事してくという視点」でものごとを考えるようになる一步になったのかもしれない。その意味で、限定的であろうが、この対話的ライフストーリー・インタビューはAさんをエンパワーし自己解放する役割を果たしたと言えるであろう。

参考文献

- 赤石千衣子、2019年、『ひとり親家族』岩波書店。
- Atkinson, Robert, 1988年 The Life Story Interview Sage Publications Thousand Oaks, CA.
- アトキンソン、ロバート（塚田守訳）、2006年『私たちの中にある物語』ミネルヴァ書房。
- 神原文子、2007年、「ひとり親家族と社会的排除」『家族社会学研究』18（2）：11－24。
- 厚生労働省、2012年、「全国母子世帯等調査結果報告」（2011年度）。
- 小林美希、2015年、『ルボ母子家庭』筑摩書房。
- 桜井厚、2002年、『インタビューの社会学』せりか書房。
- 桜井厚、2005年、「ライフストーリー・インタビューを始める」桜井厚、小林多寿子編著『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房：11-70。
- 内閣府男女参画局、2016年、「男女共同参画白書平成28年版」。
- 内閣府男女共同参画局、2013年、「男女行動参画白書平成25年度版」。
- 濱口桂一郎、2016年、『働く女子の運命』。
- 藤田孝典、2015年、『下流老人 一億総老後崩壊の衝撃』朝日出版。
- 藤田結子、2017年、『ワンオペ育児 わかってほしい休めない日常』毎日新聞出版社。
- 水無田気流、2014年、『シングルマザーの貧困』光文社。
- 湯沢直美、2009年、「貧困の世代的再生産と子育て—ある母・子のライフヒストリーからの考察」『家族社会学研究』21（1）：45－56。

-
- i 研究対象者のAさん（仮名）は研究対象者であるが、筆者が書いた本稿の原稿を読み、修正すべきことは修正し、コメントをしてくれている。その意味で共同作品である。Aさんが個人的な経験について詳細に話してくれたものについての出版に関しては、Aさんから口頭で許諾を受けている。個人的な経験、思いをここまで話してくれたAさんにこの場を借りて、感謝をしたい。
- ii Aさんによれば、「毒親」は、いくつかの特徴を持つ。中でもAさんに当てはまるものとして、①親は絶対であると主張する親、②過剰に口出しする親、③できたことで評価する親、④傷つける親、⑤その時によっていうことが変わる親。その中で、③が特に記憶があり、子供時代はできたことも評価されない経験があったと言う。一番記憶に残っている事例としてAさんは説明する。大学4年の時に、書道で師

範位を取った時のことです。父親から、家族で夕食中に「個々の書道会は長い年数通えば（つまり、月謝をつぎ込めば、師範に）受からせてくれるんだ。」と失笑気味に言われたことでした。④にも当てはまりません。④には“ユーモアという体裁をつくらって、子どもの揚げ足をとる親”とも指摘されていますが、まさにそのような感覚でした。現実には姉の書く文字は毛筆も硬筆も私より格段に上でした（今も上手ですが、高校2年のときに書道教室を辞めてしまっていたため、師範位はありません。そのことを踏まえた上での父の発言だったので、試験に受かった喜びの報告は一瞬で、「ですよー」という納得というか、自嘲する思いに変わってしまいました。しかし、この時を機に、何をしても評価されないこともあるのだということ学んだ気がします。⑤に関しては、母は父の意見の代弁者として娘に関わる人だったために、物事の良し悪しが父の一言によって覆されるのは日常的なことでした。ダブルバインドもここに当てはまることかと思います。彼らは、彼らなりに本気で子どもの為を思って鼓舞していたり、人様に迷惑をかけない人間になってほしくて、厳しく育てていたつもりでいることは理解しています。それが彼らにとっては紛れもない子どもに対する愛情であり、彼らの考えるまっとうな子育てだったことも間違いありません。だから、毒親は厄介なのです。」と言うAさんは、このようなことがAさんの人生のさまざまな場面で経験し、それらの経験を通して「自己肯定感」が少なくなったのではないかと考えているのであろう。自らも親になって、両親の愛情は理解できるが「毒親」によって傷つけられたという思いは、今のAさんに残っている。いま親になり、自分もそのような「毒親」にならないようにしたいと考えている。

- iii 藤田孝典（2015年）は『下流老人 一億総老後崩壊の衝撃』で、現代の日本社会においては、老後の生活は年金だけでは生活できない厳しい現実があることをさまざまな事例を用いて描写し、警鐘を鳴らしている。Aさんもこの本を読みそのように考えたのかもしれないが、Aさん自身が恐れる下流老人とは、狭義では、“経済的に自立した日常生活が送れない高齢者”ということだが、広義では、“自分の望む幸せな老後が経済的な理由によって実現できない高齢者”と考えている。その意味で、「下流老人にはなりたくない」という発言は「余暇も含めてある程度自分の望む生活を実現したいと思い、予期不安が増幅します（笑）」、「孫に洋服とか買ってあげたり、旅行にも行きたい、QOLの満足を求めた発言だ」と説明している。